

## テモテへの手紙第一1章15節 「そのまま受けるに値する福音」

### 1A 世に来られたキリスト

#### 1B 神に反逆する世

1C 世を支配する者

2C 神への冒瀆

#### 2B 世を愛される神

1C 罪人をも愛する方

2C 罪人にみなされた方

### 2A 罪人を救うキリスト

#### 1B すべてが罪人

1C 神を知らない者

2C 自分自身をさばく者

3C 自分を教えない者

#### 2B 罪からの救い

1C 神との離別

2C 神のかたち

### 3A 罪人のかしら

#### 1B 栄光の福音

1C 非の打ちどころのない義

2C すべてを明かされる方

#### 2B 霊的な律法

1C 救いようのない罪人

2C 恵みの知識

## 本文

テモテへの手紙第一を開いてください。私たちの聖書通読の学びは、新しいところ、テモテへの手紙に入ります。第一と第二があり、その次にテトスへの手紙がありますが、これらは、牧会書簡と呼ばれます。教会を牧している者たちに対して、パウロが個人的に指導する手紙です。知識に豊かなパウロが、牧会者また監督に対して書くものであるから、それこそとても高尚な、そして難解なことを書いているだろうと思われるかもしれません。牧者の心や情熱が、そうした難しいことに取り組むことだと、みなさんも思うかもしれません。いいえ、そうではありません。今朝の本文は、1章 15 節です。「**「キリスト・イエスは罪人を救うために世に来られた」ということばは真実であり、そのまま受け入れるに値するものです。私はその罪人のかしらです。**」キリスト・イエスが罪人を救うために、世に来られたということ。それを、何ら味付けすることなく、そのまま受け入れるに値する

のだ。これは真実なことばなのだ、パウロは言っています。

むしろ、違った教えを持ち込んで、あれこれ争いを引き起こしている者たちに対して、厳しく戒めるように命じているのが、テモテへの手紙なのです。いろいろなことが起こる世の中です。そして社会は複雑になっています。しかし、その中でいかに純粋に福音を信じていられるか？そして、キリストにある神の愛に留まっていられるかが、キリスト者の務めであり、教会を指導する者たちの務めであります。この純真なことば、そのまま受けるに値することばを今朝は見てください。

### 1A 世に來られたキリスト

まず、キリスト・イエスが「**世に來られた**」ということから見たいと思います。

### 1B 神に反逆する世

世というのは、聖書においては、「神の反逆する世界」という意味合いがあります。「Iヨハネ 1:16 すべて世にあるもの、すなわち、肉の欲、目の欲、暮らし向きの自慢は、御父から出るものではなく、世から出るものだからです。」「ヤコブ 4:4 節操のない者たち。世を愛することは神に敵対することだと分からないのですか。世の友になりたいと思う者はだれでも、自分を神の敵としているのです。」ですから、単に世界というよりも、世界のすべてを造られた神に、反逆する仕組み、制度と言ったらよいでしょう。

### 1C 世を支配する者

どうしてそうなっているかと言いますと、そこには世を支配する者がいて、その支配者が初めに神に反逆して、墮落したからです。「Iヨハ 5:19 私たちは神に属していますが、世全体は悪い者の支配下にあることを、私たちは知っています。」そしてパウロは、私たちが「エペ 2:2 かつては、それらの罪の中にあつてこの世の流れに従い、空中の権威を持つ支配者、すなわち、不従順の子らの中に今も働いている霊に従って歩んでいました」と言っています。

### 2C 神への冒瀆

したがって、世の成りの果て、最後の姿は実に、忌まわしいものです。主は、その姿を、地上の王たちと淫行を働く大淫婦として暴いておられます。「黙 17:3-4 それから、御使いは私を御霊によって荒野へ連れて行った。私は、一人の女が緋色の獣に乗っているのを見た。その獣は神を冒瀆する名で満ちていて、七つの頭と十本の角を持っていた。その女は紫と緋色の衣をまとい、金と宝石と真珠で身を飾り、忌まわしいものと、自らの淫行の汚れで満ちた金の杯を手を持っていた。その額には、意味の秘められた名、「大バビロン、淫婦たちと地上の忌まわしいものの母」という名が記されていた。」なぜ、世が淫婦として表れているのか？それは、元々、創造者である神に愛され、この方に頼って生きるのが、人が造られた道です。それから逸脱して、他のものに頼っている姿が、あまりにも痛々しいのですが、それが淫婦として表現しておられるのです。神によってし

か満たされない自分の心の空洞を、物や逸脱した関係で埋めようとしても、それでも埋まりません。

そして、獣の上に載っています。この獣は、反キリストであります。すべての王たちの権力が与えられて、世界を力で支配する者です。そして彼こそが自分が神であるとして、拝まない者ごとごとく殺します。究極の自己愛者です。自己愛は、自分自身が神であると言っているに過ぎません。ですから、まことの神が来られると、自分が脅かされるので、それで神を冒瀆するのです。

## 2B 世を愛される神

しかし、主は、世を愛されたのです。「ヨハ 3:16 神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに世を愛された。それは御子を信じる者が、一人として滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。」ご自分に反抗して、ご自分ではないものを愛している者たちに対して、それでも愛しておられる姿を、私たちはイエス様に見ます。主は、ご自身を罵っている者たちに対して、父なる神にこう祈られました。「ルカ 23:34 父よ、彼らをお赦してください。彼らは、自分が何をしているのかが分かっていないのです。」

## 1C 罪人をも愛する方

世を愛されたのですが、それは世にある反抗や罪をそのままいいという是認では、決してありません。罪は罪であり、反抗は罰せられるべきものですが、それでも、その人の存在を受け入れ、その人の最善を願っているのです。それが愛です。私たちは、自分に関係があったり、自分に浴してくれる人であれば、愛そうかと思いますが、無関係で、しかも自分に害を加える人に対して愛することはできません。けれども、神の愛は異なるのです。「ロマ 5:8 しかし、私たちがまだ罪人であったとき、キリストが私たちのために死なれたことによって、神は私たちに対するご自分の愛を明らかにしておられます。」私たちが、だれか自分に敵対する人々を愛せるのは、聖霊による愛でしかありえません。神こそが、尽きることのない憐れみを持っておられるからです。

## 2C 罪人にみなされた方

もう一度、繰り返しますが、世を愛するというのは、私たちのしていることがそれでいいのだよ、と言っているような愛ではないということです。罪は罰せられる必要があります。そこで、愛はどのような形で現れるのか？それは、私たちが受けなければいけない刑罰を、主ご自身が身代わりに受けてくださったところに現れます。「IIコリ 5:21 神は、罪を知らない方を私たちのために罪とされました。それは、私たちがこの方において神の義となるためです。」私は、少しでも自分のしていないことを自分のせいであるかのようにされたら、必死になってそんなことはないと言います。そして、誰かが自分のしたことによって罰せられるのを、自分がそれを行ったなどと言って、不利になるようなことはしません。しかし、主はそれを成し遂げられました。神の義が十字架で満たされましたが、それは神の、我々の思いをはるかに超えた愛の現れだったのです。

## 2A 罪人を救うキリスト

そしてパウロは、「**罪人を救うために**」来られたと話しています。

### 1B すべてが罪人

2章4節においても、「神は、すべての人が救われて、真理を知るようになることを望んでおられます。」と言っています。そこで、多くの人が反発するのです。すべての人が救われる必要があるなんて、一部の困った人たちや、問題を起こしている人たちの話なんじゃないの？と言いつたくなるのです。一部の人たちだけが救いのために選ばれて、大勢の人たちはそうでないというのは、ずいぶんと都合のいい話だな、と思うわけです。神の恵みについて、不公平感を抱くのです。しかし、聖書がはっきりと言っているのは、「**すべての人は罪を犯して、神の栄光を受けることができない**」ということ（ロマ 3:23）。自分が罪人であることがはっきりしないので、恵みがご都合主義に見えてしまいます。

### 1C 神を知らない者

自分が罪人だという認識が薄い人にある特徴は、第一に、自分には神はいない、神など知らないという態度です。それが、まさに罪人の姿です。自分の心臓の鼓動を動かすことができずに、24時間、不眠不休働いていることが、自分がすべての努力で生きているのだとすることほど、傲慢なことはありません。「ロマ 1:21 彼らは神を知っていながら、神を神としてあがめず、感謝もせず、かえってその思いはむなしくなり、その鈍い心は暗くなったのです。」

### 2C 自分自身をさばく者

そして自分が罪人だという認識の薄い人は、第二に、他人を見て裁きます。罪人というのは他の人のことで、自分自身はそれほど悪いことをしていないという自負があります。しかし、パウロはこう言いました。「ロマ 2:1 ですから、他人をさばく者よ。あなたに弁解の余地はありません。あなたは他人をさばくことで、自分自身にさばきを下しています。さばくあなたが同じことを行っているからです。」自分を他人を比べて、自分自身が見えなくなっています。しかし、パウロが言いました。「ロマ 2:16 神のさばきは、神がキリスト・イエスによって、人々に隠された事柄をさばかれるその日に行われるのです。」

### 3C 自分を教えない者

そして、道徳的な戒律や、宗教的なおきてでさえ、人をだまします。おきてを守ることによって、自分は罪人でなくなるとおっしゃいますが、戒めを人に教えながら自分自身に教えないという問題が起こるのです。それが、まさにパリサイ人など、イエス様が語られたことであり、律法によってかえって、自分が義であるとみなし、自分自身が罪が見えなくなるという問題があるのです。

このようにして、まずは自分自身が罪人であるということを知ることが必須です。

## 2B 罪からの救い

そして、イエス様は「**罪人を救**」います。救いというのは、状況からの救いではありません。当時、ユダヤ人たちは、メシア、すなわち自分たちの救世主は、異邦人の支配からの解放をもたらすと信じていました。しかし、御使いがヨセフに、これからマリアがみごもる男の子に、イエスと名付けなさいと言いました。そして、こう言います。「マタ 1:21b この方がご自分の民をその罪からお救いになるのです。」状況からの救いではないのですね、罪からの救いです。

イエス様と共に十字架にはりつけにされた犯罪人の言葉を思い出してください。一方は、「おまえはキリストでないか。自分とおれたちを救え。」と言いました。これは状況からの救いです。しかし、もう一方は、たしなめました。犯罪人なのだから、このような仕打ちを受けて当たり前なのだと思います。彼は、死ぬことから救われるのを願わなかったのです。そうではなく、「ルカ 23:42 イエス様。あなたが御国に入られるときには、私を思い出してください。」御国に入ること、イエス様と共にいることを、救いとしたのです。もっぱら神の憐れみで、自分はそこに行くのに値しないけれども、行かせてくださいと願ったのです。これこそが、神の定めておられる救いです。

## 1C 神との離別

人は神によって造られ、神と共にいるように造られました。しかし、アダムが罪を犯して、神から離れてしまいました。神はいつもいっしょにおられるのに、その関係が断絶してしまったのです。これを、罪の中にいると聖書では言っています。そして、肉体が滅んで、神が共におられるという至福から離れているところを、地獄と呼びます。その断絶を修復してくださるのがイエスです。この方のつけられた十字架によって、そこで私たちに不利な証言をするものがことごとく釘づけにされました。そして、神との間にある敵意が取り除かれたのです。これが、罪からの救いです。

## 2C 神のかたち

そして、罪からの救いは、罪によって損なわれていた神のかたちが、キリストにあって取り戻されることを意味します。自分は、だれもが理想にしたがって生きていないと感じています。自分が、どこかでボタンをかけ間違えていると、うすうす分かっています。聖書は、元々、神のかたちに人が造られていたが、罪を持っているので傷を負っているようにみなしています。しかし、キリストが来られました。キリストは神のかたちの完全な現われです。この方にあつて、神のかたちに徐々に回復するのです。そして、主が戻って来られる時には、主と同じ似姿になります。

## 3A 罪人のかしら

そして、パウロが驚く発言をしました。「**私はその罪人のかしらです。**」ということです。

## 1B 栄光の福音

1章 11節で、福音のことをパウロは、「**栄光の福音**」と呼んでいます。主の栄光に満ちているの

が、神の福音です。

### 1C 非の打ちどころのない義

テモテが対峙しなければいけない、違った教えを持ち込んでいる者たちは、律法によって正しくなれるとしていました。律法の義についていうならば、パウロは非の打ちどころがなかったのです。「ピリ 3:6b 律法による義については非難されるところがない者でした。」これほどの人だったのですが、キリストの弟子を猛烈に迫害したのも彼です。そうすることによって、神に仕えていると思っていました。しばしば、イスラム教の過激派について、彼らはイスラムの教えを捻じ曲げていると言われますが、事実は違います。経典に忠実にならおうとして、あのようなことを行っています。人は自分の義によって生きると、自分がかつても酷いことをしていることにさえ気づかなくなります。

### 2C すべてを明かされる方

しかし、主はパウロに現れました。ダマスコに行って、キリストの弟子たちを捕縛するために歩いていました。ところが、まばゆいばかりのイエスに出会って、目が見えなくなり、そして回心しました。自分が迫害していたイエスの名を、宣べ伝えるようになったのです。パウロは、その光によって、自分のしていることが罪であることを明らかにされたのです。一般のユダヤ人よりも、サマリア人ほうがメシアを知っていた一件が、聖書には書かれています。しかも、サマリア人の中でもふしだらな女だと思われていた人が、メシアについて正しい知識を持っていました。女はイエスに言いました。「ヨハ 4:25 私は、キリストと呼ばれるメシアが来られることを知っています。その方が来られるとき、一切のことを私たちに知らせてくださるでしょう。」全てを知らせてくださる方なのです。

### 2B 霊的な律法

そこでパウロは、悟ったのです。自分は律法を守り行って、非難されるところのない者でした。しかし、それは律法の読み間違いだったのです。正しい解釈をしていなかったのです。殺すなど命じられているところには、人を心で憎んでいたら、それも殺すことに他ならないという解釈を知らなかったのです。イエス様は、ご自身が律法を実現するために来ると言われました。そして、パリサイ派のかたちだけの律法の遵守ではなく、心における姿勢をも含めた遵守を教えておられました。つまり、律法というのは霊的なのです。

### 1C 救いようのない罪人

そのことを悟ったパウロは、自分がどんなに罪深いかを知りました。戒めにある、神の聖さが明らかにされて、自分が極度に罪深いことが明らかにされたのです。そして、罪の法則にがんじがらめになっていることを知りました。「ロマ 7:24 私は本当にみじめな人間です。だれがこの死のからだから、私を救い出してくれるのでしょうか。」自分が救いようのない人間だと悟りました。だから、ここで「罪人のかしら」と自分を言っているのです。

## 2C 恵みの知識

ここまで来て、パウロが言っている意味が分かるでしょう。福音には、主の恵みが満ち溢れていて、そこには神の祝福と栄光が現れています。「キリスト・イエスは罪人を救うために世に来られた」ということばは真実であり、そのまま受け入れるに値するものです。」ということなのです。神の恵みは、単に、都合の良いという安価なものではありません。単純な真理ですが、これこそがすべての者を救う、神の知恵なのです。そのまま受け入れるに値します。何か、それだけでは足りないのだとか、別のことをしたがる者たちがいます。しかし、主は、ゆだねられたものを、しっかりと守りなさいと命じられます。